琉球大学学術リポジトリ

「プロフェッサー・オブ・ザ・イヤー」を受賞して

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学大学教育センター 公開日: 2018-07-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 野入, 直美, Noiri, Naomi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/41386

「プロフェッサー・オブ・ザ・イヤー」を受賞して

「現代社会のしくみ」担当　野入　直美（法文学部）

この賞を受章して一番良かったことは、授賞式のときにほかの受賞者の皆さんとお知り合いになれたことでした。中には常連の方もおられて、いろいろと教えていただくことができました。

一方で、学長や理事の皆さんとは一言もお話しできず、残念でした。受賞によるインテンシブ経費はありがたく使わせていただきましたが、共通教育の充実のためには、１月にもらって３月までに執行しなければならない２０万円ではなくて、年度の初めからすべての教員が使える、ちゃんとした経費が不可欠です。なかなか一教員には、理事とそういうお話ができる機会がないので、授賞式を楽しみにしていましたが、賞状をもらう時に拍手をしてくださっただけでした。せっかくご出席いただいた意義が少なかったように思いました。私はいつも、１００人の学生がいる大講義室で、学生とのコミュニケーションをとるのに心を砕いていますが、大学という巨大な組織におけるコミュニケーションもまた、なかなか難しいことであるようです。

現代社会のしくみ２組では、毎回の授業の最後に、感想や質問を学生に書いてもらっています。次の授業の内容に関するアンケート調査をすることもあります。１０分ほどしか時間をあげていないのに、自分の体験や疑問点など、Ａ４の用紙にかなりみっちりと書いてくれます。１００人の学生の中には、必ず一人二人、あなたはいったい何者ですかと聞きたくなるようなセンスのいいコメント、その人の生活世界を豊かに反映した率直なコメントを書く人がいます。授業の冒頭で、それらを読み上げ、私からのコメントへのリプライをつけくわえると、全体のコメントの水準が上がっていきます。

私は、現代の社会のことを、すでにできあがっていて、私たち個人がそれに合わせていくしかないものではなく、個人と個人、個人と集団、集団と集団の相互作用の中で、社会というものは日々、新しく作られつつあるというように話します。授業のテーマは、ウチナー意識やジェンダーなど、正解のないことが多いです。私にとって、学生のコメントは、得難い情報の宝庫になっていて、そこから研究のアイディアをもらったこともあります。私自身の立ち位置が深く揺さぶられることもあります。現代社会のしくみの授業は、この大学でやっている仕事の中で、一番楽しい仕事です。

今後の課題は、共通教育と専門教育の有機的な連携の深化です。そのためには、制度的なバックアップも不可欠になります。もし共通教育の非常勤講師予算が削減され、私の共通教育の担当が増えることになれば、その分、専門の科目を担当できなくなるおそれがあります。共通教育の非常勤講師予算の削減は、共通教育だけでなく、専門教育を含めたトータルな教育水準に、深刻なダメージを及ぼすでしょう。また、旧教養部出身の教員１名に

つき、共通教育７コマのノルマを貼り付けるやり方も、教養部を解体するときの過渡的措置だったはずが、恒常化しています。プロフェッサーオブザイヤーを選び、受賞者だけにインテンシブ経費を与えるというのは、教員の個別の努力を評価する、＜個＞と＜競争＞の論理によるものだと思います。それらの論理が有効に機能するとすれば、それを下支えする＜協働＞の論理があってこそではないかと私は考えています。